
賢いママになりたいくて

ハルアユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢いママになりたくて

【Nコード】

N9831C

【作者名】

ハルアユ

【あらすじ】

元キャビンアテンダントの筆者が日々の育児を通じて見える世界を描きます。不思議なこととおしいことなど…

ブローグ

私は数年前までキャビンアテンダントをしていた。

結婚していたが子供はおらず、とくに欲しいとも思っていなかった。そんな私が妊娠して出産し、気が付けば今は二児のママになっていた。すると今まで決して見えなかった、知らなかった世界がそこにあった。育児の大変さ、夫の言動、姑の登場、ママたちの世界結構おもしろい。私のように客観できるとかなり観察しがいがある。

フライトをしていたころ子連れがよくのつてきた。そのころの私が母親たちをみていて、

「なんてきちんとしたお母さんなんだろう」と思ったことは数えるほどしかなかった。

今、公園で会うママたちは実にいろんなタイプがいて、でもみんなとても頑張ってるなあと思う。この人たちも飛行機に乗ったりすればあの頃の私のような乗務員に「もっと状況見てよね」なんて思われちゃうのかしらん？

というわけで 私の楽しい??日々の経験をシニカルに書きたいなあと思った。全国のママさん、怒らせちゃったらごめんなさい。

では…次回にあいましょう

只今妊娠中

妊娠した。まさかの妊娠だった。びっくりした。てゆーか、勝手に私は妊娠しないとまで思っていた。結婚して4年、避妊していたわけでもないのに子供ができなかったし、何よりとりたてて子供を望んでいなかった。母になった自分をイメージできなかったことも理由のひとつだ。今、仕事してお給料はおこづかいで好きなもの買ってエステやネイルサロンに通いまくって、おいしいものの食べに行ったり夫婦で旅行にいたり、自由になっている自分がそれらを引き替えに母になれるとは到底思えなかった。もひとつオマケに私はぎりぎり30代だったので…40歳になる2歩手前だった。世間ではやれ不妊治療だ、代理母だと大変な思いをしている人もたくさんいるのに、そんな簡単に私が妊娠するのか？

もしかしてできたかも…とそれでも夫にいいながらフライトに出た。でもきつと生理が始まるよ ステイ先で。とも言った。行き先は数カ月に一度スケジュールに入るかどうかのパリ。そりゃあ 何かなんでも行きたいさ。

結局それが私のラストフライトになったのだけど…話を戻そう。

結局妊娠が判明した。その時点でもうフライトは出来ない。産休か、または産前地上勤務かを選択できる。私ははずみで地上勤務を選んだ。フライトならたいていは、タクシーで通勤できる時代だったが、地上勤務となると真面目に公共交通機関を使わなくてはならない。でもリムジンバスは認められない。初めての電車通勤だった。成田まで路線バスを含めて4回乗換え、二時間近くかかった。妊娠中に思い知ったのは 公共の場で席を譲ってくださるかたがほとんどいないということだ。確かに妊娠初期は妊婦であることはまずわからない。人によっては6ヶ月すぎてもわかりにくい。譲る側としては「単に太っているだけかもしれないし微妙なことだからもし妊

婦でなかったらマズイ」と思うらしい。実は私もあまり気付かれなかった。冬だったのでコートを着てしまふとますますわからない。よく夫に「もっと妊婦らしく歩かないと」と言われた。どうやら私は歩く速度もかなり速く、姿勢もやたらによかったらしい。夫はペングンのように歩くのが妊婦と思っていた。夫

いわく 妊婦らしく歩けば周囲も気付いて例えば 席だつて譲ってくれるはずだ。果たしてそうか？私のお腹がかなり目立ってきてもその私を押し退けて席をとる人もたくさんいたし 目の前に妊婦の私がいても譲ってもらえることはほとんどなかった。いや皆無だった。

実際そんなに座りたいのかというと 私の場合そういうわけでもない。ただ座ったほうが安全だというだけだ。もちろん楽でもある。何より譲ろうとしてくれる気持にとてもうれしさを感じる。

でも私も妊娠するまでは妊婦には冷たかったかもしれない。電車にのって妊婦を意識したこともないし 妊婦とわかってても「病人じゃない」という認識だった。もっというと お年寄りにですら 私のほうが疲れてると思ひ 寝たふりしたこともある。

妊娠してみても 世間の無関心さを痛感した。以前の私を含めて健常者の傲慢さも実感した。体が普通でない大変さもわかった。優先座席なんてあつてないようなものだ。駅などのエレベーターも あなたは階段使いなさい！と言いたくなるような人が先を争つてのる。長男は今二歳だが混んでる電車では立たせるようにしている。そしてたまたま座つていても 必要とする人にはゆずらせる。もちろん私も立つ。ママとしつかり手をつなげば大丈夫、男の子は立とうねと教えている。いいか悪いかはともかく、少なくとも先を争つて席をとったりする子供や、自分のおばあちゃんに立たせて平気で座る孫にはなつてほしくない。

どうしても座りたいなら、ガラ空きの電車にのる。夫もそう騷られてきたそう。今でも夫は電車では座らない。

世の中のお父さんお母さん、 どう思いますか？

子だくさんの街

長男を妊娠 出産したとき 私達夫婦は千葉のとある街に住んでいた。ここはほんとに整備された街だった。CMにもよく使われるほど、街並みはきれいだ。新しいマンションが立ち並ぶ道は美しく舗装され風紀を乱すような店は一軒もない。

公園はそこかしこにあり、電線は地中に埋まり空は広く 目障りなごみ置き場などはない。各マンションに ごみシューターがあり 集積所に直接吸い込まれるのだ。つまりゴミの収集車は街を走らない。ついでにいうと住人たちも皆小綺麗にお行儀よくしている。

子育てには最適な街だった。もちろん私たちは当初はそんなつもりもなく羽田や成田にいくのにアクセスがよかったから引越しただけだった。

確かに環境はよく 長男が産まれてからもお散歩には不自由しなかった。

それにしてもこの街はやたらに子連れが多い。誰もがだっこやバギーで小さい子を連れてる。とにかく小学生や赤ちゃんがやたらにいる。でもそんなのここに限らずよそだって同じようなはず。でも何か普通の街とは違う。なんでだろう？考えてみた。そうだ。お年寄りがないのだ。ついでに大学生くらいの人もあまりみかけない。街そのものがまだ若いからか？

みんなが同じようなマンションに住み、世代もほとんど一緒に、同じような生活レベルなのだ。

ある時 この街のコミュニティセンターに子供を連れていった。ここで親子で体操するクラスがあったのだ。お教室そのものは楽しかった。息子もまだ5ヶ月だったがよろこんでいた。

ただ、そこに来ていたママたちが あまりに雰囲気と同じで…なんだか気持悪かった。独特の空気だった。うまくいえないが「みんなと一緒にが一番」と思っていてそこから少しでも秀でることも、

逆に、はみだすことも許さない空気だった。排他的なのだ。

私も妊娠するまで客室乗務員だったので 女性の世界にとっぷりつかっていた。派手な世界ではあったが、排他的ではなかった。そもそも人数が多いため知らない人もたくさんいる。初めて会う人たちばかりで乗務することもある。一応グループ制で主要なフライトは同じグループ員と原則はフライトするが他のよそのグループフライトにポツンと自分だけジョインしたりする。いちいち排他的になっ
ていられないのが 現実なのだ。だから入社当時よくいわれた。一人で行動できて、一人で食事ができなければ：つまり一人を楽しめなければ この仕事は孤独すぎてキツイだろう、と。もちろんみんなと食事にいたり一緒に買い物だつてするが、いつもベツタリではない。基本は個人行動だ。むしろ誰かと一緒にいなきやいやだというタイプはウザイと思われる。みんな 独りでいることも、楽しめる。無理にあわせたりしない。あつ、だからいつまでも独身でいる人が多いのかしらん？

とにかくこの街のママ集団にすぐ違和感を感じた。そして年寄りが極端に少ないことも、あまりにきれいすぎる街も、どうなのかと思っていた。息子にはいろんな物を見て知ってほしかった。おじいさんもおばあさんも子供も、いろんな人がいることをふつうに見て育ってほしいと思った。ところで、夫は 世田谷に実家がある。生まれも育ちも東京だ。彼は中学から私立に通ったのだが 電車通学とはいえ近いし 部活も夜までできた。時にはさぼって 遊んだりもしたらしい。夫はここにいと幼稚園くらいまでならいいが それ以降になると、学校の選択肢はかなり厳しいと懸念していた。都内の私立に通うとなると 片道かなりの時間をゆうすることになり、部活も寄り道もできない。他の友人ができることを彼ができないのはかわいそうだという。

群れる習性が私にはなかった。無理して子供に友達を作りたいとは思わなかった。そんなのは公園で日々遊んでいるうちに自然にでき

るはずだ。しかし群れたがるママたちは「子供に友達」といつつ

「私にママ友達」という感じだ。それも必要だろう。否定しない。ママ友から得られる情報も大切だ。めんどくさいのは「みんな同じがいい、仲間といつも一緒」と思っていて 仲間以外には排他的であつたりする人達だ。

この街にはその人種が多い。私の直感はその言っている。

加えて、夫の意見である進学の問題。そしてこの街のあまりに整いすぎた環境。もろもろ考えて私達は引っ越しを決めた。買い換えだ。いわゆる普通の住宅街 中流以上が集まる環境のよい もし公立にいくとしてもレベルの高い学区。

渋谷になるべく近いところ。これは主人の実家との兼ね合いだ。

見つかるまで探すつもりだった。物件探しの話はまたいつか。これも結構おもしろかった。

あの街は今、紅葉が美しいだろう。懐かしいと思うがそれ以上に今の街に引っ越してよかったと思う。

子供は今、街を走るゴミの収集車に夢中だ。外に飛び出して彼等の仕事を見ている。そしてずっと手を降っている。ご近所のお年寄りにはかわいがっていただいてる。お友達もできた。

いろんな人達とふれあつて豊かに育つてほしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9831c/>

賢いママになりたいくて

2010年12月21日03時35分発行